

研究課題	唐代初期の浄土教思想の研究 — 迦才『浄土論』を中心として —
研究代表者	工藤量導（大学院研究生）

研究の目的

本研究は「隋唐初期の浄土教思想の研究—迦才『浄土論』を中心として—」と題し、唐代初期の長安において活躍したとされる迦才という学僧の著書『浄土論』三巻における浄土教思想とその成立背景の解明を行うことを目的とする。

迦才『浄土論』は、南都や叡山の日本浄土教では重要視されたが、法然以後は一転して中国浄土五祖とよばれる道綽・善導の系統が中心となり、その法系から外れる迦才の浄土教は注目の度合いが少なくなり、近代まで研究はあまり進まなかった。

その思想についても、道綽から善導への正統的な系譜に対する傍流として位置づけられ、日本浄土教の淵源となる凡入報土説や本願念仏説と乖離した思想がみられることから、道綽教学から「後退」した、あるいは善導教学と比して「不徹底」などと過小な評価がなされてきた。このような宗学研究にもとづく認識は、昭和30年に迦才研究の唯一の専著を出した名畑応順氏を含め、現在にいたるまで研究者の側にも多分に残存している。

したがって、本研究のねらいは、迦才の浄土教思想を従来のような道綽・善導との比較による評価軸から解放し、どこまでが同時代の思潮傾向で、どこからが迦才独自の思想であるのかを明確にして、中国浄土教における迦才の実像を描き出すことである。

筆者は、これまで消極的な評価が下されてきた凡夫化土往生説こそが、迦才の思想全体を貫く基本的なコンセプトになっていると考え、その思想的解明を主眼とした。従来の研究は、化土往生という結論部分を取り出すにとどまっていたが、本研究では化土往生説を迦才教学の起点に設定することによって、衆生論・実践論・仏土論などの諸教説のとらえなおしを試みる。そのうえで、迦才の思想には道綽だけでなく、隋代の淨影寺慧遠や吉蔵の影響力が多分にみられること、さらには地論・摂論学系の浄土教との接点を指摘し、摂論学の素養をもつ迦才の浄土教思想の特色を引き出す。

そして、道綽や善導による凡夫の報土往生説とは別の思想的文脈から、迦才独自の立場として化土往生説が生じた経緯を示し、隋唐初期の浄土教思想の新たな一面を提示する。

研究の経過

研究の目的に合わせて論文を執筆し、「迦才『浄土論』の研究」の題名で課程博士学位請求論文を提出した。研究の経過は次の通りである。

- 4月 先行研究・目次・文献等の整理
- 5月 論文執筆、推敲（序論、第一章）
- 6月 浄土学研究会発表、論文投稿
- 7月 論文執筆、推敲（第二・三章）
- 8月 論文執筆、推敲（第四・五章）
- 9月 浄土宗総合学術大会発表、論文投稿
日本印度学仏教学会発表、論文投稿
- 10月 課程博士学位請求論文提出

具体的な作業としては、先行研究の整理と論文執筆ならびに推敲であった。

従来の本研究の分野において、名畑応順氏による『迦才浄土論の研究』（法蔵館、1955）は迦才に関する唯一の総合的研究であって、今なお必須の研究書であることは間違いないが、出版から半世紀を経ている。その後、現在までに迦才に関して注目すべき研究論文がいくつか提出されたものの、同時代の道綽や善導の研究に比べると芳しい成果を挙げているとは言いがたい。また近年、中国仏教そのものの研究が大きく進展を見せているが、隋唐初期の浄土教研究においてそれらの研究を十分に生かすできておらず、迦才と地論、摂論、華嚴等の諸学派の教説との接点について具体的な指摘や検証はほとんど行われていなかった。

これまで筆者が発表してきた論文は、迦才『浄土論』と同時代の諸文献との接点について強く意識しながら執筆しており、従来の研究では注目されてこなかった

論点を検討している。それらの論文を、本研究のコンセプトである迦才の化土往生説の解明という点にもとづいて大幅に加筆・訂正を加え、さらに不足分の追加執筆を行い、課程博士学位請求論文としてまとめて提出した。

研究の成果

(1) 内容の要旨

論文の各章において注目すべき点として、第1章「『浄土論』の成立背景」では、『浄土論』がいかなる背景において成立したのか検討した。第1節では、弘法寺に吉蔵、道世、嘉尚が在寺したことを指摘し、さらに法常、玄琬、智儼など多数の地論・撰論学系の学僧が弘法寺に往来していたことを明らかにした。第2節では、道綽と迦才の師事関係について疑問を呈し、『統高僧伝』と真福寺本・戒珠『浄土往生伝』の記事の検討から、迦才が并州地方に蓄積されていた資料をもとに道綽伝を記すことができた可能性を提示した。第3節では、迦才には『安楽集』の取意引用の影響を受けている点はほとんど見当たらず、道綽が『大智度論』『往生論』（『往生論註』）に教学的な根拠を求める傾向が高いのに対して、迦才は『起信論』『撰大乘論釈』の影響が強く、この相違点が両者の浄土教思想を分岐せしめる一因であったことを明らかにした。

第2章「迦才における凡夫の概念」では、道綽の末法説を受容した迦才の凡夫観について検討した。第1節では、迦才の末法凡夫観は、道綽に比べると輪廻無窮性を強調した宿因的な思想は薄く、娑婆世界（穢土）という外部の悪環境による退縁を強調する傾向にあり、ゆえに穢土を厭い、西方浄土を欣うという厭欣二門説が説かれたことを明らかにした。第2節では、迦才が四十八願の各願を一々に査定したうえで凡夫の願と菩薩の願とに大別し、本為凡夫兼為聖人説という特徴的な凡夫論を示していたことを明らかにした。この計一願の選定は、迦才の浄土教思想の指針を決定づける重要な意義を有している。第3節では、『観経』の九品説について、迦才が慧遠の九品説を批判する意図は『観経』に説かれた凡夫の化土往生（九品往生）の意義を顕彰することであり、迦才が往生の意義を処不退説に求めていたのに対して、慧遠は往生や不退の内容にほとんど関説せず、両者の『観経』理解の姿勢に根本的な対立があったことを指摘した。

第3章「実践行に対する批判とその克服」では、末法世の凡夫が修する実践行の易行性に対する批判とそ

の対応について検討した。第1節では、はじめは易行性への批判を論点としていた別時意説が、迦才の頃には仏土論や經典論も巻き込む複雑な問題へと膨れ上がっており、迦才はそれらの論点を強く意識したうえで自らの教学体系を組み立てていたことを明らかにした。第2節では、実践行体系の意義について、実践行の易行性に対する批判として生じた別時意説の克服を企図して、『往生論』の五念門をモデルとしながら、その内容を換骨奪胎し、了義経である十二経七論、すなわち經典にもとづく在家者の中下根行と、論書にもとづく出家者の上根行という二層的な行体系を構築したことを明らかにした。

第4章「西方化土説の思想構造」では、西方浄土を化土と位置づける仏土説の構造とその思想的背景を検討した。第1節では、迦才の四土説を考察した結果、その学説が撰論学派の四土説に由来し、尚かつ、『浄土論』は四土説に関してもっとも多く情報を含有する典籍であることが明らかになった。第2節では、長時化土説について、隋唐代の諸師における化土の定義は「長時・暫時」や「浄土・穢土」などの性格が一定していないのに対して、迦才は化土を暫変として理解する立場（法常、道綽など）を批判して、西方浄土は長時かつ清浄の両性質を具した長時化土説を主張していたことを明らかにした。第3節では、通報化土説は当時の諸師の学説のなかに浸透していたが、迦才は別時意説への牽制という側面も含めて、独自の視点から通報化土説（通三土）の提示を行っていたことを明らかにした。迦才の通報化土説の特色は「往生→見土」という構造を示したことである。

第5章「西方浄土に関する諸問題」では、これまで注目されなかった西方浄土に関する問題を取りあげて検討した。第1節では、慧遠や吉蔵は西方往生を三界内の分段生死ととらえていたことを確認し、迦才もそれに準ずる理解を示していたことを明らかにした。第2節では、迦才が西方浄土に封疆ありとする説の思想背景として、吉蔵『勝鬘宝窟』に封疆という分限は仏が衆生利益のために用意したものであると同時に、衆生自身の業感が作り出したとする解釈が示されていたことを指摘した。第3節では、迦才が用いる種子欲・上心欲の語義は、真諦訳論書に示される随眠欲・上心欲と一致し、このような解釈はすでに撰論学派の文献において一般的に行われていたことを明らかにした。種子欲とは、たとえ報土であったとしても残存し続ける微細な習気煩悩である。第4節では、有量寿・有漏・三界撰という要素を抱える化土において処不退を成立

する理由として、『起信論』の専念阿弥陀仏説の「常見仏」による不退ではなく、むしろ仏土側のはたらきとして「退縁が除去された仏道修行に最適な環境の処」という独自の学説を主張していたことを明らかにした。

(2) 迦才教学の特色と思想的位置

本研究において明らかになったことのなかから、主要な2点について述べたい。

第一に、本研究の主題とした迦才の凡夫化土往生説の思想的意義である。これは内外の両側面からその意義を見出すことができる。まず外的側面として、隋代の慧遠や吉蔵は弥陀身土を低位に位置づけるのが通説であったが、撰論研究の進展に同調して十八円浄の報土説が有力になり、一方で智儼や道世の教説にあるように別時意説がからむことによって低劣な凡夫が即時に通入することは不可能となった。このような状況を鑑みて、迦才は隋代の西方浄土観（応身応土説）に回帰しつつ、さらに独自の視点から凡夫往生の意味を模索するなかで迦才独自の教説が生じたのである。このように迦才の化土往生説は、道綽の報土往生説との比較だけでなく、隋唐代の思想史的な文脈のなかでとらえてはじめてその意義が明らかになる。すなわち、報土往生説から化土往生説への流れは単なる後退ではなく、撰論研究等の高まりに同調してあらわれた必然的な思想展開とみることができる。

次に内的側面として、本為凡夫兼為聖人説、実践行の体系化、別時意会通説などの主要な教説は、いずれも凡夫の化土往生を前提として案出されたものであった。すなわち、迦才における化土往生説とは、往生成立の瞬間だけを問うものではなく、娑婆世界における凡夫の往生因から、往生後に彼土修道が完結するまでの全過程を射程におさめた教理体系のことを指す。よって、彼土修道の面を保証する長時化土説（時間）、通報化土説（階位）、処不退説（修道）という諸教説の成立が迦才の教学形成の必要条件であり、それによる教理的・信仰的な確信が『浄土論』を著すモチベーションとなった。これをもって、道綽や善導とは異なる「迦才の凡夫往生説」が提示されたということができよう。

第二に唐初期の仏教界における迦才の思想史的位置である。従来定説とされた道綽との師事関係は大いに疑問があり、筆者は両者に面授の関係はなく、『安楽集』という典籍こそが迦才と道綽教学との初接触ではなかったかと結論づけた。実際に、両者の引用経論や共有問題については時代・環境による差異が顕著な面もあり、迦才は唐初の長安仏教とのつながりがより深

いといえる。検討の結果、当初考えていた以上に吉蔵の浄土教思想との接点を得られた。従来、迦才と吉蔵の思想的影響を指摘した研究はない。とくに西方浄土に関する基本的な立場は、道綽以上に吉蔵と意見が一致する点が多く、吉蔵の『観経義疏』や『勝鬘宝窟』に示された唯心浄土説、二種生死説、三界摂不摂説、弥陀弥勒説、九品説などの諸教説との深い結びつきがみられる。一方、道綽『安楽集』の末法説や本願論が、迦才に重要な示唆を与えたことは確かであり、その受容をもって迦才の浄土教が、智儼や道世などの当時の一般的な浄土教理解と袂を分かち重要な基点となった。

また、従来、独創的な思想とみられがちだった迦才の諸教説（四土説、二種生死説、封疆説、上心欲・種子欲、十解位説、四種無生法忍説、四不退説など）は、実はそのほとんどが隋唐代の議論の延長上に成立しており、迦才は独自の要素をわずかに追加したに過ぎないということもみえてきた。迦才の教説は基本的に懐柔的・折衷的な性格を有しており、想定した対論者との対話が不能となるような独創性を求めたものではない。

(3) 迦才教学の形成過程

本研究で知りえたことをもとに、『浄土論』撰述の経緯、ならびに迦才の浄土教思想の形成過程について素描する。

迦才の事蹟を示す資料はないが、唐初長安の弘法寺に住したことは間違いない。唐代初期の長安では『撰大乘論』と『涅槃経』の研究が最も盛んであったとされ、その主要な担い手である涅槃・地論・撰論学系の学僧たちが自由闊達に教理研究を進めていた。静琳がいた弘法寺にはそれらの学僧が数多く往来し、法常、玄琬、智儼などの著名な人物とも交遊があった。迦才はこのような環境を背景として撰論系の学問を修める弘法寺の学僧であったとみられる。迦才が道綽と面授していないとすれば、およそ次のような略歴となる。

① 長安での修学期

……撰論学を中心とした学解仏教の修学

② 浄土教との出会い

……并州の実践者に関する情報収集、『安楽集』入手

③ 『浄土論』の執筆

……六四八年以降、長安弘法寺にて執筆完了

これとは逆に、先に浄土教から学び、後に撰論学を修めたとはなかなか考えにくい。その理由は、序文における『安楽集』への批判が迦才自身における学問水準の高さを前提にしていること、さらに浄土教を学んだ後に撰論学を修学する動機が説明できないからであ

る。したがって、迦才は長安において学解仏教を修めているときに何らかの契機があって浄土教への興味を有することになった。実のところ、撰論学派による別時意説は阿弥陀仏信仰との機縁を潜在しており、そもそも浄土教との接点は皆無ではない。

『安楽集』の入手がどの時点であったかは不明であるが、迦才はそれを読み、とくに末法説のくだりに鮮烈な感銘を受け、浄土教へ帰入する重要なきっかけになった。長安の学僧として平穩に学解的研究を進める傍らで、実のところ迦才自身がその内面に胚胎していた娑婆世界の穢土性という問題を開眼せしめる内容であったことだろう。

しかしながら、迦才が感銘を受けた浄土教思想を長安に弘法するにあたって、『安楽集』は問題の多い典籍であった。一つは取意引用が甚だしく正確性に乏しいこと、もう一つは長安仏教の主流であった『起信論』や『撰大乘論釈』を前提とした浄土教理解が消化されていないことである。さらに迦才が熟知していた別時意説への対策が不十分であると痛感し、長安の学僧へ向けて新たな教学体系を提示することを決断した。

迦才はひとまず『安楽集』を措き、阿弥陀仏信仰にかかわる諸経論を読破するという手順を選んだ。弘法寺という学問寺院の性格や、隣寺である延興寺に一切経をおさめた経蔵があったことはその活動を助長するものであった。膨大な諸経論を読解するなかで、迦才は了義不了義を軸とする経論観を育み、『撰大乘論』の教説にもとづき「教(=経)は必ず理(=論)有り、理は必ず教に順ず」という立場をとった。これによって、まずもって經典を主として、論書がそれに準ずるといった基本的な構想ができあがった。迦才の浄土教思想はすべてこの経論観の形式にもとづいて案出されたものである。

迦才の主要な教説はすべて経説に端を発し、理論的な肉付けを論書によって補論するという形式が徹底された。したがって、迦才の思想の理論的根拠はまずもって大乘經典に求めることができ、このような経論観を構想の中心にすえて浄土教の体系化を図ったということができる。すなわち、迦才は浄土の教えを大乘仏教の理事という大きな枠組みのなかで一翼を担う法門として位置づけていた。逆にいえば、西方往生とは事の面が成就されたに過ぎず、両輪・両翼である理の面が円満されたわけではない。それゆえに凡夫の化土往生説は最終的に無上菩提の獲得(=理)まで見すえた教義体系が組み上げられている。このように迦才の浄土教思想は了義経の経論観にもとづき、諸大乘経論の思

想との共存を図りながら、統合的解釈を志向して構築されたものであった。

研究の課題と発展

本研究では迦才の思想の独自性を浮き彫りにするために、隋唐代の諸師の文献との教学的な接点を可能な限り見出して、思想史的な位置づけを行うことを心がけた。結果として、従来のように道綽と強固に結びつけられていた迦才像を解放し、その事蹟や思想が長安仏教と不可離の関係において成立していたことを示すことができた。迦才『浄土論』は道綽以後、善導以前の浄土教思想として、その固有性と独自性を保持しているといっても過言ではない。

またその中で、迦才の浄土教思想を解明する過程において、従来の中国浄土教の祖師研究だけでは知りえなかった実にさまざまな議論が存在していたことがわかってきた。本研究において示すことができたのはその一部に過ぎず、実際にはさらに多くの問題が取りざたされていたはずである。それらの問題をよりひろくとらえることなしに、今後の迦才研究が進展することはない。

また、本研究が新たな視座を提示できたのは、ひとえに半世紀以前には知られていなかった地論宗や撰論学派の研究ならびに諸資料の充実がその背景にある。これからも諸分野の研究成果を総覧しながら、より多くの資料を用いて迦才の位置づけを正確にしてゆく必要がある。とくに地論・撰論系の文献との接点を見出してゆくことは、迦才研究の進展だけでなく、唐代初期における浄土教思想の位置づけや課題を知りうる重要な糸口になると考えられる。

なお、本研究では、迦才の浄土教思想が後世に与えた影響面についてはほとんど触れることができなかった。この点は今後の課題として残されることとなった。迦才が日本の初期の浄土教思想に与えた影響は看過しえないものがあり、それはおそらく本研究で提示し得た迦才の意図とは異なる形で受容されているものも少なくない。中国と日本における浄土教がそれぞれ異なる一面を有していることは周知の事実であり、迦才の浄土教の日本的受容という側面を論究することによって、日本浄土教における思想展開のあらたな一面を見出すことが可能になろう。そのためにはまずもって中国浄土教における迦才の位置づけをより綿密に解明してゆく必要があり、今後も基礎的な研究を積み重ねることによってその一助としてゆきたい。

【主な参考文献】

- 大竹晋『唯識説を中心とした初期華嚴経学の研究—智
儼・義湘から法蔵へ』大蔵出版、2007年。
- 小野勝年『中国隋唐 長安・寺院史料集成』法蔵館、
1989年。
- 勝又俊教『仏教における心識説の研究』山喜房仏書林、
1961年。
- 金子寛哉『『积浄土群疑論』の研究』文化書院、2007年。
- 川口義照『中国仏教における経録研究』法蔵館、
2000年。
- 木村清孝『初期中国華嚴思想の研究』春秋社、1977年。
- 柴田泰山『善導教学の研究』山喜房仏書林、2006年。
- 竹村牧男『大乘起信論読釈』山喜房仏書林、1996年。
- 名畑応順『迦才浄土論の研究』法蔵館、1955年。
- 西本照真『三階教の研究』春秋社、1998年。
- 平井俊栄『中国般若思想史研究』春秋社、1976年。
- 深貝慈孝『中国浄土教と浄土宗学の研究』思文閣出版、
2002年。
- 神子上恵龍『弥陀身土思想の展開』永田文昌堂、
1950年／1968年。
- 望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942年／
1976年。
- 山本仏骨『道綽教学の研究』永田文昌堂、1974年。